'87.4.

児童文学

最首悟

子供への大人の願望の結晶化

今村葦子『あほうどり』

児童文学書＝子どもの本という図式

▽……△

騒いでいるのは大人

「教育の力は（学びたいという意欲をもつ）幸せな性向の持ち主は別として、めったに効果をあらわさないものである。（しかも）学習意欲をもつ者にとっては、教えることは大体において無駄なのである」。これは「ローマ帝国衰亡史」を書いた一八世紀のギボンの言葉だそうだ。児童文学論を集めた「オンリー・コネクト」のなかの「子どもと本」で、アンソニー・ストーが引用している。

「教育の力」というところを「読書させようとする努力」に、「学びたい」を「読みたい」に変えると、ちょうどよい。子どもに本を読ませようとしてもほとんど努力は実らないし、読みたい子はコントロールがきかずに勝手に読む。

私も勝手に読んだ。親が禁止したり隠したりする（たとえば艶笑譚など）本をもとめて読んだ。いっぱい読んだなかに、いわゆる児童文学といわれているものもあったなあと、あとで思い出したりしている。そしてそういう児童文学は、今読んだほうがいろいろと楽しめる。川端康成の訳した「小公子」や「小公女」など、大人の読み物にこそふさわしい。

子どものころ、児童文学を好んで読んでいる子はまわりにいなかったし、大人になってから見回した子どもの中に、そういう本だけを好む子はいなかった。「子ども文庫」活動で、たしかな感触を得てきた人たちには、やや申しわけない気がするが、本を読みたいと思って行ったら、子どもの本しかないので、それでも一生懸命読んだという子どもたちが多かったにちがいない。何しろ本がなかった。

そういうわけで、三月二〇日付毎日新聞の本田和子（児童学）の「『子どもの本』の終焉」というエッセーはあまりピンとこなかった。「子どもの本」のために、葬送曲を奏でねばならない季節が訪れている、すなわちわりに、際やかに匂い立せたのは、日常を異化するものとしての『子ども性』」という言い方に何の異論もないけれど、騒いでいるのは結局は大人なのである。だいたい、子どもたちに遡ばれ続けた不朽の名作というような惹句は、いつも眉つば的であったのだ。

▽……△

骨格変える設定変更

そういった意味では、「子どもはかくあってほしいなあ」という大人の願望が、結晶したような「子どもの本」は、もともと大人が読む本として、その存在はきわめてクリアカットである。今村葦子の『あほうどり』（評論社・九八〇円、一九八七・二月）は、今、そのような範疇を代表する作品といってよい。

「おかあさんが縫ってくれた赤いキャラコの水着」と大水で枕木が流れた橋の手前で必死に汽車を止めた「踏切番の仙三じいさん」が時代を象徴する。それは昭和十年代前半と戦後の高度成長期以前を合わせたような時代なのである。坪田譲治文学賞をもらった『ふたつの家のちえこ』では、その二つの時代がむちゃくちゃにミックスされて出てくる。大きなフランス人形、レスリングごっこ、革のランドセル、ふうせんガム、佐助と「才蔵ごっこ、教育委員会、ビニールのカバン、肺病、保育園、さびた自転車、貴重なせっけん、電気釜、給食など、などなど。はて、電気釜はいつごろ登場したかなどと考え出すと、私たちの世代にはたいへん楽しい。ただし戦争の気もない。

『あほうどり』の時代背景はもう少しぼんやりしている。この一四〇枚の作品に、野鳥が七種、虫類が一八種、その他動物が五種、木が一五種、草花が二一種、作物が五種、それにカッパ、狸、あほうどりを入れて七四種の生きものが出てきて、大人を楽しませる。この作品は、元は福音館の「子どもの館」（一九八二・七月号）に掲載されたのだが、五ケ所ほどの改変をのぞけば、ほとんど原型を保っている。一番大きい改変は、「あほうどり」とよばれる信太の設定が、「学校の方は、何度も何度も落第して、この四月に、ちよ子たちと同じ四年生になったのです」だったのが、「信太は、どうしても、うまくしゃべることができないのです。『あほうどり』と呼ばれるのは、そのためでした。それでも、この四月には、ちよ子たちと同じ四年生になりました」になった。ほとんど原型を保っていると言ったが、この設定変更は大きく、作品の骨格を変えてしまうほどの影響がある。

この作品のハイライトは、「泣きたい時に歌う」ような熱いちよ子が、夏休みの大河の水泳ぎで渦にまきこまれ、溺れそうになったところを、土手で悠長に遊んでいた信太が、やにわに服を着たまま飛びこんで、ちよ子を助けるところにある。ここの個所こそ、大人が夢みる子ども像が出てくるのだが、ここはやっぱり信太がそうとう威がちがう大きい子でなければならないところなのである。

今度出た本では、信太はできないんだが、学令どおり四年生になりました、と読めるようにしてしまったので、もともと智恵おくれでのんびりしている子が、俊敏かつ抜群の水泳能力を見せるなどあり難いことなのに、さらに上塗りして不自然にしてしまった。

さらにもう一つ、ちよ子は、いじわるをしてきた「あほうどり」に助けられて、なんだかなしくて、もう二度といじわるをしないだろうと思うと、心の中がからっぽになったような気がするのだが、この部分で、「ちよ子はいままであほうどりとあんなような遊びをするのが、いちばん楽しかったのでした」が削除されてしまった。

筋も紹介しないで何を言っているといわれそうだが、要は、「子どもの館」の読者は大人だったということである。今度は子どもが読者という想定で、改変が行われたらしくもあるが、にもかかわらず坪田譲治的世界をなつかしがって読むのは大人（それも年老いた）なのだから、結果はずいぶん中途半端になってしまった。（さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻）